

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19730448
 研究課題名（和文）関係の文脈における攻撃性の組織化の研究：表象および実際の対人関係との関連
 研究課題名（英文）A study for organization of aggression in the context of relationships: A relation with representations and interpersonal relationships
 研究代表者
 工藤 晋平（KUDO SHIMPEI）
 広島国際大学・心理科学部・講師
 研究者番号：70435064

研究成果の概要（和文）：

本研究は親密な関係における攻撃性を個人の特性としてではなく、その個人が有する関係の取り方を規定する潜在的な表象の観点から捉えるものである。そのための方法として、Waters & Waters (2006)を参考に、NaS 法、および NaSA 法を作成し、実施した。NaS 法は不安や危険が関係の中でどのように取り扱われるかに関する表象を捉え、NaSA 法は攻撃性の取り扱いに関する表象を捉えことを想定している。信頼性に関しては一定の成果が得られたが、妥当性の確認は課題として残される部分もあった。NaSA 法は攻撃性の組織化と理論的に予想できる形で関連し、それは顕在的な表象（対人関係の取り方のスタイル）との関連よりも強かった。しかし、NaS 法ではそうした関連は見られず、攻撃性の組織化には NaSA 法で捉えられる潜在的な攻撃性と安全の表象が関わることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of project was to capture the organization of aggression in an intimate relationship from the viewpoint of implicit representations which guides an one's way of relation, rather than from the viewpoint of one's trait. Based on Waters & Waters (2006), NaS and NaSA was developed. NaS measures representations with regard to the way of dealing with anxiety/danger within a relationships, and NaSA with aggression. Both had certain reliability, but some problems in validity. NaSA correlated with the aggression in line with the theoretically predicted, that was higher than correlations of explicit representations, however NaS did not. The representations by NaSA seemed to relate to the organization of aggression.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	0	1,600,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	510,000	3,810,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：臨床心理学・攻撃性・心的障害・愛着理論

1. 研究開始当初の背景

これまで人間の攻撃性は、個人の特性やパーソナリティとして扱われることが多く、それはDVや虐待などの親密な関係の中で見られる攻撃性に対しても同様であった。しかしながら、近年では攻撃性が最も向けられるのは、通常その攻撃をする本人にとって最も重要な対象であることが明らかにされ(Marcus & Swett, 2002)、攻撃性を関係の文脈の中で理解する必要性が言われるようになった。Fonagy(2003)はこれまで言われてきたように、人間の攻撃性は学習されるのではなく、むしろその制御が学習されることに注目し、そうした制御の獲得が安全な愛着関係の文脈において生じることを強調した。

愛着理論はこうした理解に関する理論的・実証的枠組みを提供するもので、ここでは「表象」が注目されている。表象とは、愛着理論においては、乳幼児記から繰り返される養育者との相互作用から、自己と主要な養育者、およびその関係が内在化されたものであり、これによって一貫性のある認知的、情緒的、行動的、神経学的な反応が導かれるとされるものである。ある種の心的なシミュレーションモデルと表現することもできる。

この表象のあり方が、関係の文脈で葛藤が生じた際に、葛藤が生じた理由の理解、葛藤への相手と自分の寄与の算定、相手が取った行動の解釈、葛藤そのものの強さの認識、葛藤に対する自分の情緒的・行動的反応などを導き、さらに自分が取るであろう行動への相手の反応の予測などをもたらし、ここでの攻撃性の発現、あるいは制御に影響を及ぼすと考えられる。攻撃性を関係の文脈で理解するとはそのような意味であり、攻撃性がどのように組織化されるかは、その個人がどのような表象を活性化させるかという点から検討する必要がある。

2. 研究の目的

当初、上記のような問題意識のもと、攻撃性の活性化につながると想定される表象の活性化について捉え、それが同様に攻撃性の組織化に影響すると考えられる実際の対人関係とどのような関わりを持っているのか、より具体的に言えば、攻撃性の組織化にどちらかが直接的に寄与しているのか、それぞれに独自の寄与があるのか、活性化される表象と実際の対人関係の間に因果関係はあるのか、といったことを検討することを目的としていた。そのために、活性化された表象を測定する方法を、投映的方法を用いて測定することを狙っていた。

しかし、当初想定していた絵画を用いた語りの分析を通しての投映的方法が予想通りに表象を捉えることができなかつたため、異なる手法を用いて研究を進めることとした。その際に参考にしたのが Waters & Waters(2006)による、言語的刺激を用いてその語りの分析を通しての表象測定である。絵画を用いた方法よりも刺激の統制が容易で、すでに海外で表象測定の方法として確立されているため、この利用が本研究を進める上で役立つ者と考えられた。一方、これは愛着表象の測定法であり、攻撃性の組織化に必ずしも関わる表象を測定するものではない。

愛着表象のあり方が攻撃性と関連のあることはこれまでも取り上げられてきたが、ここでは攻撃性の組織化に際し活性化される表象を捉えることが目的であるため、新たに以下のような目的を立てて研究を行なうこととした。

(1) Waters & Waters (2006)による NaS 法の日本語版を作成する。

(2) NaS 法をもとに、攻撃性の組織化に関わる表象を測定しうるよう改変した NaSA 法を作成する。

(3) これらは潜在的表象を測定するものであるため、顕在的表象を測定する従来からの質問紙による測定法を用いて、両者の攻撃性の組織化への影響を検討する。

3. 研究の方法

これまでの愛着と攻撃性の研究の多くは大学生を対象とするものであり、したがって同様の対象に調査を行なうことで先行研究との比較が行ないやすくなる。そこで本研究では以下のような方法、および手続きで研究を行なった。

・調査対象者

一般大学生 227 名 (男性 134 名、女性 93 名)。このうち 19 名 (男性 10 名、女性 9 名) が個別調査によって以下の NaS 法、NaSA 法を受検した。

・測定尺度

関係質問紙 (Relationship Questionnaire: RQ)

これは個人の愛着表象を捉える質問紙で、通常顕在的な水準の愛着表象を捉える者とされる。4つの愛着スタイルが記述された文章を読み、それぞれにどの程度当てはまるかを7件法で回答してもらい、次いで最も当てはまる愛着スタイルを1つ選択して

もらう。前者が量的な愛着スタイル得点として、後者が質的な愛着スタイルとしてデータ化される。

NaS法 (Narrative Assessment for Secure base 法)

Waters & Waters (2006)によって作成された潜在的な愛着表象測定法である。1枚の紙に書かれた刺激語を見て物語を作成してもらい、その物語を7件法で評定することで、潜在的な愛着表象の安定性をデータ化する。

NaSA法 (Narrative Assessment for Secure base and Aggression 法)

NaS法の刺激語を変更することで、愛着表象の安定性ではなく、攻撃性を発現し、あるいは制御する潜在的な表象を測定する。刺激語はもともとが愛着表象を測定するものであるため、愛着関係の中でどのように安全に攻撃性を取り扱うことができるか、という意味での安定性を捉えることになる。NaS法と同様に7件法で評定を行なう。

対人葛藤方略尺度 (Handling of Interpersonal Conflict Inventory; HICI)

攻撃性の組織化の結果生じる対人関係での葛藤の攻撃的な対処の仕方を測定するために用いた尺度。対人葛藤への対処方略として「統合」「回避」「強制」「自己情報」「相互妥協」が想定されており、このうち「強制」が攻撃的な対処方略を表している。

・手続き

RQおよびHICIを配布後、個別調査の依頼を行ない、調査協力の意思を示した19名にNaS法、NaSA法を実施した。t検定、 χ^2 検定によって、受検者、非受検者の間で各変数の得点、分布に差異がないことを確認した。

なお、調査実施の際には個人情報の保護を行なうことを説明した。

4. 研究成果

(1) NaS法について

予備調査等を経て、NaS法の日本語版に用いる刺激語を決定した。刺激語群は全部で6つ(うち2つが中性刺激であり表象測定には用いない)あるが、そのうちの1つを例として示す。英語が原版である。

A. 赤ちゃんの朝 (母-子の愛着物語)

母親、赤ちゃん、遊ぶ、毛布、抱きしめる、笑う、物語、ふり、ぬいぐるみ、なくす、見つけた、居眠り

A. Baby's morning

mother, baby, play, blanket, hug, smile, story, pretend, teddy bear, lost, found, nap

(2) NaSA法について

同様に予備調査等を経て決定した NaSA 法

の刺激語群の例を以下に示す。これは本研究においてNaS法をもとに作成されたものであるため、英語の原版はない。

A. 赤ちゃんの朝 (母-子の愛着物語)

母親、赤ちゃん、叩く、毛布、抱きしめる、笑う、物語、蹴る、ぬいぐるみ、なくす、見つけた、居眠り

上記の表象測定について、信頼性、および妥当性を検討し、以下のような結果を得た。

・評定者間信頼性

研究代表者と、本研究の他の部分については未知の評定者が7件法で評定を行なった結果、完全一致率は50%と高くはなかったが、1点以内の一致率は95%であった。また評定者間の評定の相関の平均は $r=.70$ と高い相関を示した。NaS法、NaSA法それぞれに4つの表象測定のための刺激語群が含まれるが、NaS法、NaSA法を各々1つの尺度として捉えた際の信頼性係数を算出すると、NaS法で $\alpha=.74$ 、NaSA法で $\alpha=.64$ であった。

・内部相関

NaS法、NaSA法それぞれの内部相関を見ると、上記の例にあげた「赤ちゃんの朝」の刺激語群が最も他の刺激語群との相関が高かった($r=.47-.65$)。また、NaS法、NaSA法の各4つの刺激語群による物語の評定を平均して全体評定を算出すると、「赤ちゃんの朝」はこれとも非常に高い相関を示した(NaS法 $r=.94$ 、NaSA法 $r=.85$)。他の刺激語群による物語においては、他の物語との相関が低いものも見られた。

・RQとの関連

RQにおいて測定される4つの愛着スタイル得点について、「安定型」得点は安定した愛着スタイルを持つ程度を、「拒絶型」得点、「とらわれ型」得点、「恐れ型」得点は不安定な愛着スタイルを持つ程度を示す。したがって、表象の安定性を示すNaS法、NaSA法の評定は理論上「安定型」得点とは正の相関を、他の変数とは負の相関を示すことが想定される。しかしながら、NaS法では有意な相関が見られず、NaSA法では「安定型」得点、「恐れ型」得点とは有意な相関が見られず、「拒絶型」得点と負の相関を、「とらわれ型」得点と正の相関を示した。

RQは顕在的な水準の愛着表象を、NaS法、NaSA法は潜在的な水準の愛着表象を測定すると考えられるため、この結果は必ずしもNaS法の妥当性がないことを示すものとはならないが、NaS法よりもNaSA法の方が表象の安定性の測定として適している可能性を示している。なお、ここで「とらわれ型」得点と正の相関を示したことについては、日本人

は欧米人と比べるとこの得点が高くなること、また愛着スタイルの割合としても、「安定型」よりも「とらわれ型」の方が高くなることが一貫して見られており、従って日本においては潜在的な表象の安定性は顕在的には他者との関係にとらわれた形で意識されるのかも知れない。

(3) 潜在表象・顕在表象の攻撃性の組織化への影響

RQ「拒絶型」得点とHICI「強制」方略との相関は有意であったものの、弱い正の相関($r=.18$)であり、明確な関連は見られなかった。ここでの結果は一般他者版と呼ばれる、他者一般との関係の持ち方であるが、恋愛版と呼ばれる恋愛関係における関係の持ち方を同様に検討したところ、「とらわれ型」得点との間に有意な正の相関($r=.25$)が見られた。恋愛において自分に愛される価値がないという表象を有している人、一般の対人関係において他者はあてにならないという表象を有している人は親密な関係において攻撃性を表出しやすいと考えられる。

他方、NaS法、およびNaSA法に関しては、NaS法とHICI「強制」方略の間に有意な相関は見られなかった。他方、NaSA法との間には中程度の相関($r=-.49$ – $r=-.56$)が見られ、刺激語に攻撃性を含めたものの方が親密な関係における攻撃性の発現に関わっていることが示された。攻撃性を含めた刺激語に対し、それを安全な形の物語にすることができるよう潜在的な表象を有している人は、親密な関係での攻撃性が低くなるといえる。個別調査協力者の数が少ないために統計的な検討はできなかったものの、この値はRQによる顕在的な表象との相関よりも高く、親密な関係における攻撃性の組織化に関わる表象を捉える方法としてNaSA法の適用を考えるとすることができるだろう。

(4) 課題

本研究で残された課題を以下に列挙する。今後これらを検討する研究を行なうことが望まれる。

・NaS法、NaSA法の物語は海外のものに比べると短く、評定の差がつきにくい。日本人にとって物語を作るという課題に困難があるのかも知れないが、教示等を工夫する必要もあるだろう。

・NaS法、NaSA法のさらなる妥当性の確認として、潜在的な愛着表象を捉える成人愛着面接(AAI)との関連を検討する必要もある。

・今回検討したのはNaS法、NaSA法からの安定性の評定であり、物語の内容の詳しい分析と攻撃性の組織化の関連については十分に検討できていないため、これも今後検討する必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

安全基地スクリプト法による愛着表象測定：予備的報告 工藤晋平 広島国際大学心理臨床センター紀要 第7巻 2009年 印刷中.

[学会発表] (計1件)

Correlations of attachment style and aggression in Japanese university students. Kudo, S. Pster session in the Association for Psychological Science 21st Annual Convention San Francisco (2009).

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

工藤 晋平 (KUDO SHIMPEI)

広島国際大学・心理科学部・講師

研究者番号: 70435064

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: